

農業

鹿屋市

別が売りで、重さや形状の組み合わせにより7〜8段階の規格を設け、顧客のあらゆる要望に対応可能だ。

焼き芋などに加工したり、店頭で販売したりする青果品に特化してサツマイモを生産販売する。2016年設立の新参者ながら毎年150%以上取扱量を伸ばし、今期は約1200トンの見込み。「まだまだ量が足りない。3年後に年間4千〜5千トンの出荷を目指す」と浅山貴史社長(48)。

もともと関西で茨城産サツマイモをメインに卸売業を営んでいた。需要が高まり、鹿児島産を拡大しようとしたが、焼酎やでんぷんの加工原料用を主とする生産者・問屋が多く、ニーズに答えられなかった。そこで、産地の鹿屋市に会社をつくったという訳だ。

風味が良く、貯蔵性の高い品種「紅はるか」を扱い、市内を中心に計14社弱ある自社農場や各地の契約農家から品を集める。細かな選別が売りで、重さや形状の組み合わせにより7〜8段階の規格を設け、顧客のあらゆる要望に対応可能だ。

規格外品を使った商品開発や農産物の安全性を不す国際規格「グローバルGAP」取得にも取り組む。卸売業で築いた販路を生かし、首都圏で展開する大量販店や飲食業者に取引を広げている。「田舎でも都会目かけてビジネスはできる。食がおいしく、人の温かい鹿屋市に農業で貢献できれば」と意気込む。

(成尾由理香)

廃校でサツマイモ出荷

2018年12月期の売上高は3億円弱。従業員14人。就労継続支援事業所から選果作業のパートを受け入れ、農福連携にも取り組む。鹿屋市輝北町下百引113の2。電話0994(71)3855。



廃校となった体育館を改装した出荷場  
—鹿屋市輝北